

# 危険な 棄地域Ⅱ棄民 思想

国土学アナリスト  
大石久和  
Hisakazu Ohishi

廃させて次世代に引き渡す自由など現世代にあるわけがない」という意味での「国土の守り」なのである。日本海側と太平洋側との総体が「日本国」なのだ。  
九州大学の施光恒准教授は、ブログのなかで次のように言う。

「評論家の江藤淳氏は『日本文学の根底にあるのは、土地に眠る死者の魂の痕跡を感じる精神だ』と論じました。土地に臨み、過去の人々の暮らしや思いを受けとり、歌に詠みこむ。そこから日本の文芸が誕生したのだと述べています。」

昨今の尖閣や竹島の問題で国土に対する意識が高まることは大いに結構なことです。でも、さらに踏み込んで国土の意義を考察し、土地に根差す先人の生活や努力に思いを馳せる感受性や、地域への深い愛着の念を取り戻すことも必要ではないでしょうか。それが荒れ果てた地域社会の再生を目指す政策に結びつき、日本古来の道徳観の復興につながっていくと思えるからです」

遠藤乾・北海道大学公共政策大学院教授は、最近の『中央公論』で以下のように示した。

「近年特に気になっているのが、二十一世紀になっても衰えることを知らない東京一極集中

## 雪

国を思えばノスタルジックな気分になる。雪に覆われた水墨画の世界は幻想的で、たまに観光で訪れる分には風雅に富むのだが、川端康成が雪国をトンネルの向こうに置き、此岸から眺める彼方の彼岸としたように、雪国で暮らすとなれば容易なことではない。

雪国では、十一月頃から春まで続くうっとうしい曇天が始まり、重苦しい気分させられるばかりか、このころから異様な湿度が家中を湿らせる。そして正月を迎える頃には、ついに雪の中での暮らしとなる。冬ごもりでこの時期をやり過ごしてきた昔とは違い、防雪設備を設け道路の除雪排雪を行って活動を維持しなければ暮らせない時代となって、雪はいなすものから戦わなければならないものとなった。温暖化で今後は少雪となるという声もあったが、近年豪雪の中心が北上して青森などでは史上最大級の豪雪が続いている。

太平洋側に冬の間、空っ風などという乾燥した風が吹き、好天に恵まれるのは、脊梁山脈がかなり高いために、山脈の北側で雪と湿気を落としきった風が太平洋側で吹くからである。シベリヤ寒風と対馬暖流を前提とすれば、日本列島に降雪があるのは必然だ。日本海側だけで降雪のほとんどを引き受けているのは、脊梁山脈

(の思考法)である。

頭脳も、情報も、資金も、あらゆるものが東京に集まる。地方大学出身者の同窓会は、東京で開催したほうが集まりがよい。(略)しかしその一方で、地方への感覚は、薄れていく。そこに生身の生活があり、知恵があり、誇りがあることは、次第に汲み取られなくなっていく。(略)政治家・官僚・ジャーナリストが無意識に地方を切り捨てていく。その結果、日本自身が持つ奥行きや多様性は、観光や旅行で消費する対象として常にそこにあるものと前提され、それを支える社会的なインフラに割かれるべき心はもはや失われがちである」

まさにその通りの主張が原田泰・早稲田大学政治経済学術院教授によってなされている。彼は公共事業について次のように言うのだ。

「人がほとんどいない場所に、多額のお金をかける必要があるのでしょうか。むしろ、人を別の場所に移すということも考えた方がいいと思います。(略)住民のなかには『防潮堤を造るくらいなら、そのカネを俺にくれ』と考えている人は大勢いると思います。移転費用の一部を一人ひとりに支給した方が安く済むでしょう」

彼の主張は、経済原則に忠実なことだけが正

の存在とその高さゆえである。

このきわめて厳しい自然条件下で暮らす日本海側の人々には、太平洋側の人間にはない季節の移り変わりへの深い情念があり、春や夏の訪れや風景の変化について感度の高い心が養われているとともに、厳しい困難に対する忍耐力も身につけている。

この著しい生活不便地に多くの人々が生活していることで、多くのものを全国の人々が手に入れている。米や酒などという産品以外にも、海岸、水田、森林など、日本人の原風景とでもいうべき心象を提供している。ここは重要な観光資源であるだけでなく、豊かな自然が工業製品にも活かされている。新潟中越地震によって自動車エンジンのピストンリングの供給が滞って、国中の自動車生産に支障を来したこともあった。

日本海側の不便なところに日本人が生活しているから、これらが可能になり、またこうした行為を通じて「国土が守られている」のである。これは、日本海側に日本人がいなくなれば外国人が住んでしまおうと言っているのではない。もちろん、その懸念がないことはないが、何千年もの昔から、先人たちが苦勞して田畑を開き川を鎮めてきた国土を、「寸土たりとも荒

しいとする経済至上主義だ。ベネッセの福武總一郎氏は、「経済など文化の僕でしかない」と言う。人はそれぞれに多様な価値を追求しているのだ。原田氏の主張には、われわれ人類が克服したはずの「棄民思想」がある。自分を便利に此岸に置いたまま、条件不利地域を彼岸化して向こうに置いておいたのだ。「人がいて地域がある」のであり、わが国では「人のいない地域」など地域ではない。棄地域思想は、忌むべき棄民思想そのものだといわなければならない。

人が住まない国土は必ず荒廃する。繰り返すが、現世代の経済的な理由などで国土や地域を荒廃させる自由などをわれわれは持っていない。彼は、東日本大震災からの復興についても、同じように金の掛かる復興などせずに首都圏にでも来いと思っているのだろうか。地方について経済以外の価値を何も考えたことがないのだろうか。

遠藤乾教授は、イタリアでは「地方に恥じらうことなくお金を落とす」地域の産業を育てているし、フランスでは、地方の豊かな風景や伝統を守るために、「国土整備」という言葉でくるんで田舎を守っているのに、日本では、田舎の大切さやそのマネジメントへの感覚が薄れてきていると嘆いているが、まったく同感である。